

講義理解を目指した日本語学習の実践 —留学生に対する学習デザインの提案—

三宅 若菜・福島 智子

要 旨

筆者らは、留学生が大学の講義に参加できるようになることを目標とした日本語授業を行ってきた。本稿では、授業を履修した学生へのインタビューを行い、インタビューを文字起こししたデータを分析し、考察を行った。その結果、履修する専門科目の講義を理解する際にも実践で学んだことを応用できたとする事例や、書くことに自信をもつようになった事例、専門科目の講義に参加する動機が向上した事例などから、大学の講義に対する留学生の積極的な参加を促す場を本実践が提供していることが明らかになった。反面、毎回異なる内容の講義を聞くことで、専門用語に対する苦手意識が強化されたという問題も示された。今後は大学の講義に限定せず、様々なリソースを使い、講義への参加のアプローチを考える必要がある。

【キーワード】 講義理解、自律的な学習、学習デザイン、ノートの取り方、リアクションペーパー

1. はじめに

大学の講義において求められる聴解能力は、会話聴解能力とは異なるという指摘(Richards1983)がされて久しい。大学の講義では、音声を用いて情報を与える教師側と情報を受け取りながら理解を進める学生側との間に、長時間にわたって一方的な情報の移動が行われる。また、講義の理解に関する評価は筆記試験あるいはレポートの場合が多い(平尾1999)。そして、講義では、日本人大学生と同等の理解能力が求められるため、留学生にとって講義内容を理解することは最も基本的で重要なスキルの一つともいわれている(小川2011)。さらに、大学の講義は、専門性が高く、カリキュラムや教材も担当する講師がそれぞれの方法で行っている。そのため、従来のような教師主導型による日本語授業では、多様な講義に対応することは不可能である。それぞれの講義に対応していくには、学生自らが目的意識や問題意識を持って、自らの講義に適した学習をデザインしていかなければならない。

そこで、本実践では、留学生が大学の講義に参加できるようになることを目標とし、留学生自らが講義に適した学習をデザインしていくよう支援した。本稿では、これまでの実践の経緯をまとめながら、本実践がいかにして学生の自律的な日本語学習を支援するよう変化していったかを論じる。次に、2011年の事例について報告し、分析、考察を行うことにより、今後の課題を提示したいと考える。

2. 実践に至る経緯

筆者らは、留学生が大学の講義に参加できるようになることを目標とし、2006年から実践を積み重ねてきた。実践は、学生の様子や専門科目の講義を分析するなどして常にその内容を変化させてきた。表1は、これまでの実践の経緯をまとめたものである。左から順に、実施年度、実践の対象者、授業名、授業コマ数(1コマ90分)を記した。右列の実践内容は、今回の実践の中で核となった活動である、(1)講義の流れをとらえる、(2)用語を分類する活動、(3)講義の内容を短くまとめる、(4)専門科目の講義に参加する活動がどのような経緯で行うに至ったかをまとめた。

表1 実践の経緯

年度	対象者 【授業名、コマ数】	実践内容			
		講義の流れをとらえる	用語を分類する	内容を短くまとめる	講義に参加する
2006	学群1年生【「日本語専門基礎AⅡ」(通年の2コマ)】	講義の構造/教師の指示		ノートのとり方を振り返る	
2007					
2008	【同4コマ】				
2009			分類する	ノートをとる練習	
2010	学群2年生以上 交換留学生 【「日本語演習(上級・聴解とノートの取り方)」(一学期)】	視覚化する		リアクションペーパーを書く練習	講義に参加する
2011					

2006年は、学群の1年生を対象とした「日本語専門基礎AⅡ」(通年)の中の2コマのみであった。実践は、講義における大量の情報を整理するために、講義の中心的な部分と、その理解を助ける部分とがあることを理解する活動を中心に行った。講義の中心的な部分と、その理解を助ける部分で講義の内容が成立しているという考え方にに基づき、現在でも講義の流れをとらえる活動を行っている。

2009年には、専門用語に焦点を当てた活動を加えた。専門用語に焦点を当てたのは、授業で素材として新たに導入した「キリスト教入門」(学群1年生の必修科目)の講義には、学生になじみの薄い専門用語が多く、それが講義の理解を難しくしていると考えたためである。そこで、講義を聞きながら専門用語を見つける中で、専門用語と一般用語の区別や、一般的にも使うが専門分野で特別な意味を持つ言葉、固有名詞などに分類していった(福島他2009)。専門用語は、講義の重要ポイントに集中していることが多いことから、講義

内容を捉える上で、不可欠な活動の一つとなっている。

講義内容を理解する上で、講義の流れをつかむことと専門用語を分類し理解することは、大学に入学した留学生にとって、すぐに解決しなければならない緊急の課題であった。しかし、大学の講義を聞く際には、講義を理解するだけではなく、理解したことを発信することも要求され、それが成績評価につながっている場合が多い。例えば、講義内容がよく理解できるようになっても、ノートや配布資料に書きこんだメモを見ながら講義内容をまとめたり、リアクションペーパーとして書いたりすることができなければ、よい成績を収めることが難しい場合もあると考えるようになった。

そこで、2010年より、上級クラスの選択日本語科目「日本語演習(上級・聴解とノートの取り方)」を開講したことを契機に、講義において理解したことを書く活動にも重点をおいた実践を行った。授業は、交換留学生や学群2年生以上も対象として一学期間行った。授業の中では、ノートをとる練習に加え、リアクションペーパーを書く練習も行い、理解できたことを書く活動を大幅に増やした。

また、実際の講義に教師も一緒に聴講し、確認を行うという活動も始めた。これは、実際の講義に参加することで、これまで学んだ方法を実践し確認することができると考えたためである。さらに、教師が同じ講義を受けることで、内容を重視した実質的なアドバイスをすることができると考えたからである(福島・三宅2011)。

実践を積み重ねていくうちに、実践を担当する教師自身の意識も変化していった。実践において、教師は、専門科目の講義を理解するノウハウを教えるだけではなく、学生一人一人が専門とする講義の特徴に照らし合わせて、自ら課題を設定し、それを解決していけるよう支援することも追求するようになっていった。例えば、実践開始当初に重点をおいていた、教師の指示を明示的なものとそうでないものに分類するという活動も、当初はタスクとして取り上げて教師主導で教えていたが、現在では、取り立てて行わず、講義の流れをとらえる活動の中で、学生自身が担当教師の発言に注目しどうすればよいかを考えるというような学生の主体性を重んじる活動へと変化していった。

3. 授業の概要

対象者：日本語レベル上級13名。半年～1年の交換留学生10名、学群留学生3名。出身は、中国10名、韓国3名、モンゴル1名である。

期間：2011年5月～2011年7月、全12回(週1回、90分)¹⁾

授業のスケジュールは表2の通りである。まず、講義内容を理解するために、講義の構造をつかみ全体的な流れをとらえ、専門用語を理解できるような活動を行った。次に、その講義内容をノートやリアクションペーパーという形で発信できるようにするといった書く力を強化していった。活動では、大学で実際に行われている様々な専門分野の講義を、

¹⁾ 2011年3月11日に起きた東日本大震災の影響により、当該大学の2011年春学期の授業は5月から開始となり、通常全15回の内容を全12回に短縮して行うことになった。

各先生方の協力により録画したり、web上で公開されている講義を利用したりするなどした。

表2 授業スケジュール

	内 容	使用した大学の講義名
1	大学での講義を受けるために必要なスキルを考える	キリスト教入門
2	教師の話の切れ目をつかみながら聞く 重要な情報をそうでない情報を分ける	キリスト教入門
3	専門用語とは何かを知る 専門用語の調べ方を知る	消費税は誰が払うのですか？
4	講義を聞きながらノートをとる	ケータイ電話の契約を科学する
5	講義を聞き、その内容をまとめる リアクションペーパーの書き方を確認しながら、 よりよい書き方を練習する	アフリカ系アメリカ人の文化史
6	講義を聞き、その内容をまとめる	日本経済入門
7	講義を聞き、その内容をまとめる	国際学序説
8	講義実践	人文科学基礎(異文化という名の知の扉)
9	講義実践を振り返る	人文科学基礎(異文化という名の知の扉)
10	リアクションペーパーで、自分の意見を書く	社会心理学
11	復習①講義を聞くスキルを確認する	環境経済論
12	復習②講義を聞くスキルを確認する	環境経済論

次に、授業の内容を、一般的に日本語学習の教室で行う「導入」「展開」「まとめ」という構成で説明したい。「導入」は、授業を始める時に行うことである。一般的には、学生へのレディネスを高めたり、目標となる重要表現や文法事項などを紹介したりすることが多いだろう。「展開」は、授業の核となる部分である。様々な言語活動を通じて、目標となる表現や文法・語彙の定着を目指すことが多い。そして、「まとめ」は、授業の締めくくりである。一般的には、自己評価や他者評価といった振り返り活動を通じて、学習のまとめと今後の課題を確認するという流れで行うことが多い。

一方、この授業実践は、表3の通りである。まず、「導入」では、授業の目標を確認し、これまで自分が講義を理解するためにどのように対処してきたかを話し合う。そして、大学の講義の録画映像を見ながら、各回の活動内容に合わせたタスクを行い、これまで自分がやってきたように自分なりに対処し、行動してみる。これに対し、教師は、講義を担当した教師の意図を予測し、それに対処するにはどういった行動をすればよいかを紹介する。そして、「展開」において学生は、自ら参加している専門科目の講義において、教師の意図を予測し、それに対処してみる。その結果、学生はどうだったかを振り返り、課題が残った場合はどうすればよかったかを書く。そして、「まとめ」は、次の授業において教師とともに振り返り、対処した行動を確認する。

表3 授業の構成と内容

授業の構成	授業の内容	教室内外	
導入	授業の目標を確認する	教室内	
	これまでの対処方法について話し合う		
	大学講義の録画映像を見て、タスクを行う		
	講義を担当した教師の意図を予測し、それに対処する行動を紹介する		
展開	自ら参加している専門科目の講義において、教師の意図を予測し対処する		教室外
	自らの講義中の行動を振り返る(=課題を行う)		
まとめ	教師は提出された課題を学生とともに振り返り、行動を確認する	教室内	

以上を見ると、この実践における特徴は、教室にとどまらず教室外での活動を設定することで、学生に講義の参加について考えるためのきっかけやヒントを提供することであるといえる。そして、実践では、授業と並行して、参加する専門科目の講義の参加の仕方を見直し、問題を認識することで、自ら課題を設定し、実行していくという学習に対する自律的な態度を身につけることを目指した。

4. 研究方法

本研究の対象は、授業を受講した全学生13名(学群留学生4名、交換留学生9名)である。インタビュー調査は、本実践の評価及び改善を目的とし、2011年7月に実施した²⁾。調査協力者保護の観点から、本稿では学生の発言を、学群留学生A～D、交換留学生E～Mとして記す。データ収集と分析の手順は、以下の通りである。まず、対象となる学生全員に20～30分程度の半構造化インタビューを行い、トランスクリプションを全て発話どおりに作成した。次に、本実践の活動と関連のあるインタビュー箇所に着目し、授業で行われた活動ごとに発言を分類し、それぞれの活動に対する分析、考察を行った。

5. 結果と考察

まず、本実践の中で核となった活動である(1)講義の流れをとらえる、(2)用語を分類する、(3)講義の内容を短くまとめる、(4)専門科目の講義に参加する、それぞれの活動内容と2011年春学期の事例を紹介する。次に、授業に参加した学生に対するインタビューから、

²⁾ インタビューの質問項目は以下の通りである。

- ①この科目を履修しようと思った理由は、何か。
- ②履修してみてどうだったか
- ③授業を履修して、役立ったと思える内容は何か。
- ④授業を履修して、変化があったと自分で感じることもあるか
- ⑤講義実践に参加してどうだったか。
- ⑥授業で学んだこと以外で扱ってほしい内容はありますか。

評価にあたる代表的な発話を記し、それぞれの活動に対する分析、考察を行う。

5.1 講義の流れをとらえる活動

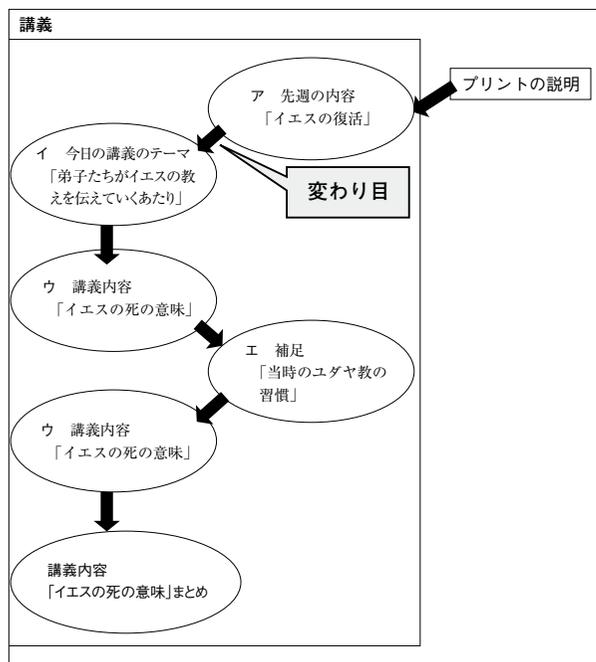
5.1.1 活動内容

大学の講義では、教師は講義の中心的な内容だけを話しているわけではない。それ以外に、具体例などを挙げて中心的な内容の理解を助ける補足的な内容を話したり、「静かにして下さい」などといった静粛を促すなどの講義を成立させるための言葉や、「では、次に○○」といった話の内容の変わり目を示す言葉や内容を話したりしている。授業では、これらの講義における教師の発話の分類を行い、講義の流れを捉えられるようにした。特に、「では」「じゃー」「次に」「はい」などの教師の発話内容が変わる言葉に注目することによって、講義の流れを把握できるよう支援した。

さらに、講義を担当する教師の多くは、「○○はどのような仕組みになっているのだろうか」「どうして△△が起きたのでしょうか」といったその日のテーマに関わる疑問を講義の最初の部分に提示することで、その答えを意識しながら講義を聞いていけば、中心的な内容を把握できるよう学生に促しているという特徴を示した。このような中心的な内容をいわば予告するような発話に注意すると同時に、講義の最後の部分で「このように」「ということで」などの表現を用い、講義において中心的な内容をまとめる発話をする事が多いという特徴を示し、講義内容の理解を促した。

5.1.2 活動例

図4 講義の流れのタスクシート



授業では、桜美林大学1年次の必修科目である『基督教入門』を用いた。その日の講義のテーマは、「イエス・キリストの復活」で、「今日はまず、ここからみていきます」という発話から中心的な内容に入っていた。そこから「福音書というのは、先週話したことですが」という話の内容の変わり目を示す言葉で、中心的な内容から、先週の内容への復習という、補足的な内容に移っていき、さらに「で、今日は、復活が本当に実現するのかというお話になります」という言葉で、講義の中心的な内容に戻っていくという構造であった。また、「イエス・キリストが、予言していたが復活がどんな

ふうにかかるのかということ、みていきたいと思います」という中心的な内容を予告する言葉には論点を表示する疑問詞があること、「このように、当時のユダヤ教にはこういったシステムがあったんですね」というそれまでの内容をまとめる言葉には、結論を表示する接続詞などが現れやすいことを示した。そしてこれらを意識的にとらえるように支援した。

さらに、講義の流れを図式化したタスクシートを使用した(図5)。この講義は、授業開始時にプリントの説明を行い、先週の内容である「イエスの復活」の確認を行ってから、「弟子たちがイエスの教えを伝える」という今日の講義のテーマを述べている。続けて、講義の中心的な内容である「イエスの死の意味」について話し、その途中で中心的な内容をより深く伝えるために、当時のユダヤ教の習慣について補足している。そこからまた、「イエスの死の意味」に戻り、最後に内容をまとめるという流れになっていた。このタスクを行うことで、講義の流れを視覚的に捉え、講義の理解を促すようにした。

5.1.3 活動に対する学生の評価

この活動に対しては、13名全員が言及し、全て肯定的な評価をしていた。特に、教師の発話内容が変わるポイントを理解できたという意見が8名あった。例えば、「内容が変わることとか、区切り。それを習って。役に立った」(H)という発話内容の変わり目がとらえられたとする意見や、「先生の次のテーマに入る言葉もよくわかりました」(G)という講義の流れを予測できたなどの意見があった。中には、「文字で見たら、わかりやすくて。プリントでこういう言葉でたな、よく使う言葉なんだとか」(J)という、毎回授業で配布する、講義の文字起こしデータから自ら分析していったという意見もあった。

そして、教師の発話の分類への理解が進むに従って、学生は、講義の主要な部分とそうでない部分を聞き分け、中心的な内容を捉えられるようになっていった。例えば、「先生が言っているところ、大事なところはどうか、わかるようになった」(J)「何が重要な部分ですか、始める部分、まとめの部分、そういう話を区別する方法を学びました」(B)「重要っていうか、必要と必要ではない内容に分けられるようになりました」(K)などである。

また、「もともとは聞いたことは全部書いていたけれど、今は重要なポイントだけ書くようになった。」(F)という重要ポイントのみをノートに書けるようになったとの意見もあった。

さらに、中心的な部分をつかめるようになっていくと、「授業を受けたあと、授業の流れははっきりした」(G)「ノートをとるときに、先生の話の流れがわかるようになりました」(F)など授業全体の流れをつかむことができたという意見も聞かれるようになった。中には、「先生が早くしゃべってもわかるようになりました」(J)「ちゃんと聞いていれば、わかりやすく話しているんだ」(J)など、日本語力は不足しているので、講義に対する理解は困難だと思いこんでいた学生の講義に対するイメージそのものが肯定的に変化している様子も見られた。

また、この方法を、自らが履修する専門講義に応用できたとする意見も6名から挙げられた。例えば、「この授業とってから他の授業がちょっとわかりやすい気がする」(B)という講義の理解が進んだという意見や、「簡単な技があれば、全力を使わなくても、簡単に授業をわかります」(A)というこれまでの講義の受け方を変化させた様子が窺われる意見も見られた。一方で、自分が興味をもった授業では、どのように聞くかというような方法を考えなくてもいいが、「嫌な授業を聞く時もノートをとらなければならない。そういうときは、この方法を使う。使ったら、たぶんとりたくなくても無理矢理とれる。」(L)というような意見や、「授業の流れをつかむ技があれば、ポイントだけで、興味のない授業でもここまで聞けるんだと実感できた」とするあまり興味のない授業でこそ、実感が得られたとする意見もあった。しかし、他授業に応用できたとする意見は、学群生3名全員から挙げたのに対し、交換留学生からの意見は10名中2名のみであった。

5.2 用語を分類する活動

5.2.1 活動内容

実践では、講義内容を理解することを促すために、講義中に理解できなかった語彙を、専門用語とそうでない用語とに分類する活動を行った。分類し整理する中で、学生が難しいと思いついていた専門用語の中には、一般用語や固有名詞も多く、専門用語は思っているほど多くないことを示した。また、専門用語とその意味を説明するタスクを行うことで、新出の専門用語は、講義の中で説明されていることが多く、未知の語彙があっても慌てず対処すればよいことを実感できるようにした。さらに、専門用語の中には、一般的にも使うが専門分野で特別な意味を持つ用語(例えば、キリスト教における「弟子」「教え」など)もあることを説明した。

5.2.2 活動例

授業では、オープンキャンパス模擬授業「消費税は誰が払うものですか」を聞きながら、重要だと思う言葉を書きとめ、その上で、「課税資産」、「租税法律主義」、「法人」等の専門用語、「施行」、「仕入れ」、「負担者」等の一般用語、「三越」等の固有名詞を分類する活動を行った。また、「卸売業者」と「問屋」というように異なる言葉で同じものを指す用語を確認した。そして、専門用語を理解するために必要なことを話し合い、その中で、専門分野の辞書やウェブサイトを使った調べ方などを学習した。さらに、もう1度講義を聞き、「租税法律主義」、「課税資産の譲渡」等の専門用語の意味を講義を聞きながら書くというタスクを行い、専門用語は、講義の中で説明されていることを確認した。また、これらの専門用語の説明を書くときには、例えば、「租税法律主義とは、法律に示されていてそれに従うことである」、「課税資産の譲渡とは、商品を買ったりサービスを提供したりすることである」というように、「～とは～ことである」という定義の表現を使ってまとめよう支援した。

5.2.3 活動に対する学生の評価

「専門用語が難しい」と述べていた学生は、8名もいた。8名のうち2名は、専門用語の学習の困難性を認めつつも、この授業をきっかけに、専門用語を学ぶ方法がわかったと述べていた。例えば、Kさんは次のように、発言している。

「専門用語とか難しくて。でもこの授業で、私の取ってる授業の専門用語とかは教えてもらえないじゃないですか。で、その部分は自分で勉強して、それをどうやって勉強するかをこの授業で習いました。」(K)

しかし、専門用語を学ぶ方法がわかったとする発言は、この2名の学生しかいなかったため、活動への全体的な評価とすることはできない。

そこで、学生の発言から専門用語の困難性を訴える理由を再分析してみた。すると、授業で扱う題材が専門用語に対する苦手意識をかえて助長させてしまっていることが窺えた。

授業では、毎回異なる専門科目の講義を見てきた。そのため、「後の授業で専門用語が出てくるときは、意味がまたわかりませんでした」(E)という発言のように、ある回の授業で、用語を分類する活動を行い、専門用語を覚えても、次の回の授業では、前回とは異なる専門科目の講義を聞くため、前回の授業で覚えた用語を応用することができない。この繰り返しを継続することで、専門用語を学ぶ方法がわかったとする意識よりも、「専門用語の分類(筆者注：用語を分類する活動)は役に立ったけれども、それでもまだ難しい」(F)という講義での専門用語への困難性を意識させる結果につながってしまったようである。

5.3 講義の内容を短くまとめる活動

5.3.1 活動内容

大学の講義では、最後にその日の授業のまとめや感想などを書くリアクションペーパーが課されることがある。リアクションペーパーで多いのは、重要用語を説明する、重要事項の理由や原因を説明するなどという課題である。学生は内容を理解していても、それを説明するのに必要な表現である「～というのは～という意味である」「～は～ということの意味している」などといった定義の表現、「(なぜなら/というのは)～からである」「それは～による」といった理由や原因を述べる表現を用いることができなければ、リアクションペーパーに自分が理解したことを反映することはできない。

また、リアクションペーパーには、「今日の授業の感想を書いてください」という指示も多いようだ。これには、何をどのように書いていいのかわからないという意見が多かった。これに対しては、重要事項や授業で取り上げた例を「まず、次に、さらに」「第一に、第二に、第三に」などの列挙の表現を用いて、順序立てて説明するよう促した。

5.3.2 活動例

授業では、まず、課題を書くのに必要な表現を学習した。定義の表現、列挙の表現、理

由や原因を述べる表現などを導入し、理解を促した。その上で、様々な講義を聞きながら課題に取り組んでいった。例えば、経済学部1年次の必修科目である「日本経済入門」の一部を聞きながら、「寡占的相互依存関係」という重要用語を定義の表現を使って説明したり、「産業の評価の基準」を列挙の表現を使って順序立てて説明したりした。また国際学部1年次の必修科目である「国際関係学」の一部を聞きながら、「なぜ貧困が生まれるのか」について、理由を述べる表現を使って説明する練習を行った。さらにオープンキャンパス模擬授業の「アフリカ系アメリカ人の文化史」の講義を聞き、「黒人の呼び方」を分類する練習を行ったり、「環境経済学」の講義を聞き、「地球温暖化はなぜ解決が難しいのか」という課題に対して、理由や原因を述べる表現と列挙の表現を使ってまとめる活動などを行ったりした。

5.3.3 活動に対する学生の評価

リアクションペーパーに言及した11名のうち、書く内容について変化したとする発言は6名あった。例えば、「最初は感想だけ書きました。今は最初は授業の内容、そして感想と二つの部分で書きます」(G)というように、リアクションペーパーでは、授業の内容にも言及することが求められていることを知ったという意見があった。さらに、リアクションペーパーへの対処のしかたがわかり、リアクションペーパーに対する苦手意識が薄れていったとする発言する学生も3名いた。例えば、Aさんの発言からは、リアクションペーパーの構成に慣れていったことで、リアクションペーパーで書くことに対し、自信がついてきていることがわかる。

「リアクションペーパーは中心的内容を書いていって、自分の意見や感想を書けば、たぶん大丈夫だと思って。勉強しました。」(A)

一方、具体的に学んだ表現について言及したのは、交換留学生の5名だった。次のMさん、Kさんの発言からは、リアクションペーパーに用いることが多い定義の表現や順序立てて説明する表現を具体的に学んだことが実践的であったことを評価していることがわかる。

「定義する言葉とか、分類の用語、このような書き方とても大切だと思います」(M)

「である体とか。この概念は三つに分けられるとかいう分類の表現、まず、次に、最後に、とかそういう表現を習って、今も使えるようになりました。」(K)

他3名の発言も同様に、文章を整理して記述できるようになったこと評価していた。

また、交換留学生の中には、「話すときはふつうにできるんですけど、書くとなると、である体とかどうしようとか、すごい難しいです」(J)「話し言葉と書き言葉の違いがわかった」(I)というような、話し言葉との違いを意識できたという指摘も4名からあった。一方、他の専門講義にも応用できたという発言は、学群留学生は全員だったのに対し、交換留学生は、Hさんの「学群の授業でリアクションペーパーを書いているので、教えてもらったことで書きます」(H)という発言のみだった。交換留学生にとっては、リアクションペーパーが必要とされる経験がないためか、書き言葉を十二分に使いこなせる状況ではな

かったようだ。そのため、書き言葉や書く順序が理解できても、文章としてまとめていくのはまだ難しいようで、「文章の講義を要約する方法がもっとやったほうがいい」(G)という要望や、「先生の言ってること、メモを取るのはぜんぜんできるんですけど、それをみながらリアクションペーパーをまとめるのが難しい」(J)というような文章に書いてまとめることに困難を感じているとの意見も4名に見られた。

また、Gさんからは、リアクションペーパーを書く方法は学べても、書く内容、つまり授業そのものに対する自分の意見がわからないという意見もあった。

「表現は大丈夫だけど、感想は、自分の意見は難しい。」(G)

自分の意見を考えるということは、講義に参加する際に不可欠な力の一つである。これは、日本語力以外の問題ではあるが、今後も同様の問題が続くかどうか注視していく必要がある。

5.4 専門科目の講義に参加する活動

5.4.1 活動内容

実践では、当該大学の専門科目に聴講という形で一回90分参加し、これまで学んだ講義を聞くことを応用し実践する活動を行った。これは、教師も学生も同じ講義に参加することで、参加のあり方やその問題点などについても共有することができると考えたからである。

聴講する講義には、教師が講義を担当する教師に事前に依頼し、承諾を得た後、履修する日本人学生と同様に、講義を聞いたり、ノートを取ったりするなどして参加をした。そして、次の回の授業において、参加した講義の内容をまとめるという活動を行った。

5.4.2 活動例

授業では、専門科目である「人文科学基礎(異文化という名の知の扉)」に参加した。講義では、日本人学生と同様に、講義を聞き、ノートを取り、講義の内容をまとめるという活動を行った。そして、次の日本語授業において、前回の講義で取ったノートを基に、講義の中心的内容をノートに取るスキルや、重要用語を説明する、重要事項を順序立てて説明する、重要事項の理由や原因を説明するスキルの確認を行った。

講義のテーマは「宗教と文化」で、特にユダヤ教、イスラム教、キリスト教について説明した。説明は、事前に配布された配布資料を、教室に設置された大画面で確認しながら進んだ。学生は他の日本人学生と同じように、講義を聞きながらノートを取った。そして、講義に参加した次の回の授業で、講義の流れを図式化したシートを示し、学生はそれぞれ取ってきたノートをもとに記入し、講義の流れを確認した。また、「ユダヤ教の十戒とは何か」、「キリスト教の最近の動向としてどんなことがあるか」などリアクションペーパーとして課されそうなテーマを挙げ、その内容を短くまとめる活動を行った。

5.4.3 活動に対する学生の評価

この活動に対して言及した10名のうち、9名の学生が肯定的評価をしていた。9名ともHさんのように、授業で学んだことを他の授業で実践することができたという意見を挙げている。

「先生の話の内容の変わったのとか。あとポイントとるのとか、聞きなれたなっていう感じでした」(H)

また、Lさんは「他の人の教室に入る。そのリアルな感じがいい。」(L)と述べていた。交換留学生には、「どんな授業をとればいいかわからない」(J)という理由から、留学生向けの日本語関連科目しか受講していない留学生も多いようである。「学群の授業を聞いていない」(I)とするように、せっかく留学しているのに日本人学生と一緒に学ぶ機会がない者もいたようである。そのような学生は、日本人とともに講義を受けること自体を評価していたのだろう。

6. まとめと今後の課題

本実践によって、学生は、教師が話す内容の変わり目がとらえられるようになり、講義の中心的な部分を理解できるようになったことが示された。中には、履修する専門科目の講義にも応用できたとする学生や、講義に対する苦手意識が薄れていった学生もいた。また、リアクションペーパーに書くべき内容がわかり、書くことに自信をもつ学生がいたことも明らかになった。学生自身が自らの講義理解について認識し、学んだ結果であるといえる。

さらに、実践では、学生が履修している他の専門講義に参加する際に、授業で行った活動を用いる、という課題を行い、進めていった。専門講義に参加することが授業で宿題として課せられることで、講義を集中して聞くようになったと評価する発言も見られた。例えば、Aさんは、「宿題がよかった。宿題を全部出さないと、という危機感がありますから。前回の授業を復習して、自分の授業をとって、提出です。提出するには、少し工夫がいりますから、復習に役に立ちます。自分の選んだ授業を一生懸命聞かなければならない。それが本当にいい。」と、この授業を受けることで、専門科目の講義に参加する動機が向上したことを評価していた。動機づけを持ち、講義に参加することは、自律的に学習を進めることにつながるとされている(Schunk&Zimmerman2008=2009)。学生が自律的に講義に参加し学べるようになるきっかけをこの実践が提供したともいえるだろう。

一方、留学しているにもかかわらず留学生中心の授業や講義しか履修していない交換留学生が多いという現状も浮き彫りになった。また、「学群の授業を受けているのを前提として、授業が進んでいくので、ちょっと難しかった」(I)という発言のように、他の専門講義に参加するという実践の前提を理解していない学生もいた。彼らは、まず日本語の授業で大学の講義に慣れ、聴解力を伸ばさせてから大学の講義に参加しようと考えていたのだという。そのような学生が、本実践の中で興味を持続するのは難しい。毎回異なる内容の講義を聞くことで、専門用語に対する苦手意識が強化されたという結果も考慮し、今後

は大学の講義に限定せず、様々なリソースを使って講義に参加できる方法を考える必要がある。

今後も、授業を受けた留学生の反応に対する調査を継続することで、留学生の講義理解に対する課題を改善していきたい。また、専門科目を担当する教師の方々との連携をより一層深めることで、支援の充実を図っていきたいと考える。

付記

- ・本実践の準備は著者2人の討議で進め、三宅は、データ収集、分析及び考察、1~4、5.1.1、5.1.3、5.2.1、5.2.3、5.3.1、5.3.3、5.4.1、5.4.3、6の部分の執筆を担当した。福島は実践授業、5.1.2、5.2.2、5.3.2、5.4.2、表2の執筆を担当した。

謝辞

- ・本実践は、桜美林大学日本語プログラムにおいて、以下の各氏との共同により進めてきたものである。阿曾村陽子、今井美登里、家田章子、坂巻延子(2003~2009年) 齋藤伸子、榎田和美(2010年)との共同によるものである。(五十音順、敬称略)
- ・授業実践にあたり、これまで桜美林大学において以下の講義にご協力をいただいた。講義を担当する先生方に感謝する。「キリスト教入門」「人文科学基礎(異文化という名の知の扉)」「環境経済論」「日本経済入門」「国際学序説」
- ・「日本語演習(上級・聴解とノートの取り方)」を受講した留学生全員の協力に感謝する。受講生の協力なしには、この研究は成立しえなかったものである。
- ・本研究は、桜美林大学言語教育研究所より助成を受けたものである。

参考文献

- Schunk, D.H & Zimmerman, B.J (2008) Motivation and Self-Regulated Learning: Theory, Research, and Applications. Lawrence Erlbaum Associates.
- Richards, J.C. (1983) Listening comprehension: Approach, Design, Procedure. TESOL Quarterly 17-2: 219-240
- 小川都(2011)「外国人留学生の講義理解についての自己評価—日本人大学生との比較を通して」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3 pp.86-98
- 平尾得子(1999)「講義聴解能力に関する一考察—講義聴解の特徴と日本語学習者が抱える問題—」『大阪外国語大学日本語・日本文化』25号, pp.1-21
- 福島智子・三宅若菜・今井美登里(2009)「大学講義の理解を目指した日本語授業の試み—専門科目の講義を素材として—」『第31回大学教育学会大会発表要旨集録』pp170-171
- 福島智子・三宅若菜(2011)「日本語授業における大学講義参加の取り組み」『第33回大学教育学会大会発表要旨集録』pp168-169